

森林生態学

石井弘明[編集代表]

徳地直子・榎木 勉・名波 哲・廣部 宗[編集]

朝倉書店 刊

2019年4月1日 発行

173頁, 3,200円+税

ISBN : 978-4-254-47054-3



まず、この書評は本書の編集代表者から依頼されたもので、また評者の所属する学科の同僚も執筆者のひとりであることを断っておかねばならない。

本書は、1989年に刊行された『森林生態学』（堤 利夫[編]、朝倉書店刊）の後継として企画された教科書とのことである。6章17節から構成され、京都大学農学部森林生態学研究室出身者を中心とした15名によって執筆されている。章の構成は、森林生態系と地球環境、森林の構造と動態、森林の成長と物質生産、森林土壌と分解系、森林生態系の物質循環、森林生態系の保全と管理、である。30年前に刊行された『森林生態学』の章立て（森林と環境、森林の遷移、森林の物質生産、森林の物質循環）と比較すると、「保全と管理」が新設されたほか、「土壌と分解系」が独立した章になっている。また、「環境」から「地球環境」となり、人為的な土地改変や気候変動の問題にも触れている。節のレベルでは、「繁殖、送粉、種子散布」や「水循環」が新しく加わっている。なお、各章末には数題ずつ「発展課題」が出されている。ただし、正解や解答例は掲載されていないので、教える側もよく勉強しないといけない。また、自ら野外で調べさせる課題や、新聞記事やインターネット上のデータを基に考えさせる課題もある。

本書は入門書であるため、自身が関心のあり頻りに新しい知識に触れている分野の記述にはやや物足りないものもあるが、評者が大学で約20年前に学んだ内容から大きく進歩している分野もあり、興味深く読んだ節もいくつかあった。造園分野の読者にとって有用な新知見が得られそうなのは、「樹木の成長と資源獲得戦略」や「水循環」の節だろうか。前者は樹木の樹形や根系の成長について理解を深めることができる。後者は森林生態系内の水循環だけでなく、植物体内の水の移動についての新知見も紹介している。（橋本啓史 記）